

高木きよ子『西行の宗教的世界』

大明堂、1989年、5,850円

谷 口 茂

初めは客観的な書評をと思いましたが、著者とは長い親しい付き合いなので、何だか窮屈でたまらず、思い切って砕けた形で書くことにしました。ざっくばらんの方が、かえって本音が出るということもありますので、読者のみなさんの御寛容をお願いいたします。

私と高木さんとの関係は、まず大相撲ふうと言えば岸本部屋の姉弟弟子です。次に岸本一門のうち、宗教思想の宗教学的な研究を志す人たちの研究会「宗教思想研究会」の同人仲間です。最後に、少し羞かしいのですが、この書評の内容とも関係があるので白状しますと、短歌結社「宇宙風」の同人仲間——高木さんは指南役、私は歌もどき作り——なのです。第一と第二の関係では、私も自分なりに年季を入れましたので、まあ対等の口がきけるのですが、第三の関係では奮闘努力の甲斐もなくいつも軽くなされて、塩で固まった土を涙で溶かしているていたらくです。いつの日か胸を借りて稽古できるようになりたいと願っていますが、何しろキャリアが違いすぎるんですね。宗教学科に入る前に国文科で勉強し、その頃からすでに短歌を弄っていた人とは比べものになりませんよ。

そんなことはどうでもよい、早く本題に移れと仰りたいでしょうが、実はもう入っているのです。第一の関係で私が明言できることの一つは、高木さんが岸本先生の宗教把握というか、むしろ宗教への態度を、実に素直に継承しているという点です。周知のように先生はジョン・デューイの名著『誰れでも信仰』の訳者で、デューイの宗教理解に共感しておられましたが、宗教プロパーの側からは

無視ないし軽視されてきた「宗教的なもの」を、単に周辺的なものとしてではなく、生きた宗教の諸相として重視されました。高木さんはこの方面での衣鉢を継いで、繊細な表現のため把えにくい宗教意識のさまざまな構造を追求し、『ウィリアム・ジェイムズの宗教思想』などを上梓してこられました。理論的な研究をひと通り終えられてからの高木さんは、古来の国文学の世界のなかに「宗教的なもの」を探索されるようになり、「日本人の宗教心」の本質を、とりわけ文学作品を通して考察する仕事に打ちこまれました。こうした努力の集積が、たとえば『文学にみられる生と死』に結実しているわけですが、今度の大著は、その延長線にある集大成なのです。

第二の関係は、先述したように第一の関係の発展形態です。宗教思想の客観的な研究を志しておられた岸本先生が、短命のために宗教学原論（『宗教学』）しか果たすことができなかったのも、及ばずながら門弟の有志の勉強会で遺志を継ごうということで始まった同人会でした。高木さんはこの会に多くの論文の別刷を提出され、合評を乞われました。それらのうち西行に関するものが、今度の本の幾つかの章の原形にはかならないのです。もちろん本書としてまとめられる段階で、かなり加筆訂正が施されていますが、本書が成るのにこの研究会がいささかでも寄与するところがあつたとしたら、私も同人の一人として非常にうれしく思う次第です。

かなり個人的なものである第三の関係まで持ち出したのは、実は本書の内容に関して、

この事柄が最も重要な意味を担っているからです。まず高木さんが歌人であるという点に触れると、これは西行研究者に要請される資格として不可欠の条件なのです。確かに歴史家も西行の実像を求めめるために必要です。また仏教学者、とりわけ密教や浄土教に詳しい専門家も、西行研究には大事です。しかし、史実が極端に少なく、幾重もの伝説で隔てられている西行は、実証的方法や固定的な信仰に基づく評価図式では接近するのが難しい対象なので、いきおい主観的な先入見を頼りに、「あるがままの姿」よりは、「かくあるべき姿」あるいは「かくあらまほしい姿」を描くのがおち、ということにならざるをえないのです。西行研究史についての批判的な論述は、「序説」で詳しくなされていますが、西行研究の決め手は、結局、残された約2000首の歌の読解にあるとする確信を、高木さんはこの前提的研究の周到さによって確信されたのでした。

歌の読みの深さは、単なる学識だけでは期待できません。歌を読むためには歌を詠まねばならぬ。これは長年にわたって歌作で苦楽をこもごも味わってきた高木さんの信念でして、数年前から古典を勉強し始めた私に対する忠告および勧誘の言葉でもありました。藁をも掴む思いの私は、こうして三十一文字をひねくり回す仕儀に立ち至ったのですが、まだ歌もどきしかひねり出せない状態では、この言葉を信じていいものかどうか依然として迷っています。歌の読みが深くなったとは、とても思えないんです。ただ悪戦苦闘を多少とも経験してみて、これまで外側からしか見ていなかった歌に対して、少しは内側に入ることができるようになった、ような気はします。だから、先達の信念を、まあ信じてみようかと思っていますところ。

ところでこれはやはり書評にしなければいけないので、内容を紹介しますが、何しろ440頁に及ぶ大著なので、とても網羅的に目配りすることなどできません。目次だって6頁にわたっています。非常に詳しい目次で、そ

のため目次に目を通すだけで、これが文字通り本格的な西行論であることが判り、敬服せずにはいられません。まあともかく章のタイトルを書き写してみましょ。各章にはそれぞれ幾つかの小節があり、その内容が窺われて興味をそそののだけれども、それを書くともう紙幅がなくなるので残念ながら割愛します。知りたいと思う人は、どうぞ本書を購入して下さい。

- 第一章 佐藤義清
- 第二章 その時代と西行の対応
- 第三章 人間関係
- 第四章 出家
- 第五章 居所について
- 第六章 『西行物語』類にみられる西行像
- 第七章 歌人西行
- 第八章 釈教歌にみられる仏教との関わり
- 第九章 神祇への態度
- 第十章 旅の修行
- 第十一章 無常感と死の意識
- 第十二章 迷いと悟り
- 第十三章 自然との関わり
- 第十四章 雪——山里の孤独
- 第十五章 月——心の支え
- 第十六章 花——自他融合
- 結び

どの章にも高木さんの国文学者としての、また宗教学者としてのこれまでの研究の成果が、集約された形で結実しているの、なかなか読みごたえがあります。しかしその一つ一つについて触れる余裕はないので、高木さんが一番力をこめて書いた終わりの三章についてだけ、少しく言及するにとどめます。雪・月・花とは、言うまでもなく日本の伝統的美意識の中心的主題です。数ある歌人のなかで最も親しまれてきた歌人として、誰もが西行の名を挙げるのも、この日本の三位一体を数多く歌ったからかもしれません。高木さんがこの三章に心血を注いだのは、たぶん終生

のテーマである「文学に現われた日本人の宗教心」が、西行のこれらの歌に最も典型的な形で表現されていると信じたからで、その意味でも本書は高木さんの代表作と言っていいと思います。

“心血を注いだ”などとまことに不粋な修辭を使ってしまいましたが、これこそまさに私が高木さんの不肖の歌弟子であることの動かぬ証拠で、ただ愚鈍さを取じるのみですが、心の一方には、高木さんは同時にルンルン気分だったろうなという確信もあるのです。とりわけ最終章を書くときはそうだったに違いありません。というのは、高木さんは知る人ぞ知る並外れた桜好き、いやこれは当人も認めておられるので有体に言いますが、真正正銘の桜気狂いだからです。三月末から四月初旬にかけて高木さんに連絡の必要が生じた人は禍いなるかな。あっちこっち花を探して夢遊病者のような浮かれ歩き、浮き世の義理を欠くこともあるんですから。まあそんな恨み言はどうでもよくて、もともと西行に興味を覚えたきっかけが同病相憐の熱い感情だったわけで、「花より徳利」の私など、もう呆れるばかりです。しかし、この共感が高木さんを精進させ、そして大きな自信を与えたのですから、本当に病気というものは恐ろしい。そういうわけで本書は、終りの三章だけ、いや最終章だけでも読む値打ちがあります。私はこれを特に国文学者に読んで欲しいと思いますが、それは「日本人の宗教心」の独特の様式、つまり宗教と文学とのまことに優雅なドッキング、むしろ宗教と文学との幸福な結婚とでも言いたいものが、ここに極めて説得的な形で提示されているからです。宣長の仏教批判以来、国文学畑の人には宗教を気嫌いする困った傾向がありますが、彼らはそのことで掛け替えのない大事なもの——「日本人の宗教心」——を見逃してしまっているのです。

ようやく調子が出たところですが、もう後がありません。最後に私の言い分を少し書きます。私はこの本を実に面白く読み、多くの

教示を受けたので、できるだけ多くの人に読んでもらいたいと思っています。しかしこれが西行論の決定版であると言うつもりはありませんし、それこそ臍頂の引き倒しで高木さんに叱られるでしょう。史実に乏しく、歌を読み解くことによってしか人間西行へ接近して行けない以上、いかにすぐれた業績であっても、所詮は「一つの西行像」であるほかはないのです。そのことは高木さんも先刻承知で、「あとがき」に「私は、私の西行像を書きたかったのである」と書いておられる通りです。そして実はここに不肖の歌弟子のつけ入る隙もあるのです。なぜなら、私にも「私の西行像」が——まだおぼろげな内的形象ながら——あるからです。

そこで一点だけに触れると、不満でも批判でもなく、ただの異見にすぎないのですが、高木さんは西行の歌をあまりにも素直に読解し、西行の言い分をそのまま聞き入れすぎているように思います。これは人間性の問題に帰着するのかもしれませんが、私は西行を、極端な言葉を使えば、案外のしたたか者、食わせ者だったのではと見ています。だから彼が歌で見せている姿は巧妙に擬装されたポーズではないかと、猜疑の念を抱いているのです。西行を不当に貶めるつもりは毛頭ありません。私も西行に魅かれています。嫌なところも含めてです。言うなれば西行における種田山頭火的要素ですね、そういうものは西行にはなかった、と断言できるでしょうか。それとも、あったとも言えないのだからどうでもよい、となるのでしょうか。ここまでくるとやはり西行像を造形する人の主観の問題ということになり、つまるところ西行については伝説的にしか語れない、と言えるかもしれませんね。本当は私が自分の西行論をものして、それでぶちかましをかけるのがフェアなんです、ない袖は振れず、結局は一人相撲を取ってしまいました。そして気がついてみれば土俵下に転落、しめた、これでオチがついた。

蒙 御 免 ！